

## 主体的な価値観形成のための社会認識過程

—第4学年単元「ごみの処理とわたしたちの生活」の実践を通して—

紙田 路子

岡山理科大学教育学部初等教育学科

(2016年10月24日受付、2016年12月5日受理)

### 1. 問題の所在と研究の目的

近年、社会科授業における知識の捉え方について変化が生じている。知識を社会から分離・独立したものを、社会諸科学の成果としてとらえるものから、社会の中で構成された意味的枠組み、相対的なものとしてとらえるものへと変わりつつある。とらえるべき知識の意味づけの変化は授業構成理論にも影響をもたらしている。反証過程を通して、現時点でより間違いの少ない社会諸科学の知識や概念の獲得を目指す授業から、知識や概念の背景にある価値や思想の形成過程をとらえることで、社会認識形成だけでなく価値観形成をも目指す授業への変化もそのひとつであろう。

著者もまた、「社会的な見方や考えは、当該の社会集団によって構成、あるいは再構成されたものである」「当該社会集団はこうした社会的な見方や考えを常識とみなし、主体的に自らをそれに従わせ、そこから外れるものは徹底的に排除しようとする。このように判断力喪失者<sup>(1)</sup>になった当該の社会集団によって秩序が再生産されることになる」という立場にたち、子どもたちがこうした「不可視の権力」から解放され、自主的自立的な価値判断ができるようにするための資質育成をめざして授業実践を行ってきた。

その方法として、著者は図1に示したような「民主的価値の具体化の過程」をもとに、小学生児童の自主的自立的な価値観形成をめざす授業を、具体化された価値を空間的、時間的に異なるそれらと比較・分析する過程として設定した。

このうち、具体化された価値を空間的に比較・分析する授業過程について取り上げよう。

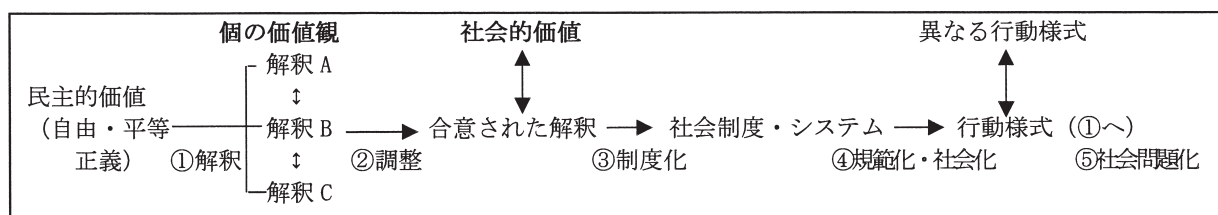
具体化された価値を空間的に比較・分析する授業は、事実認識の背後にある価値判断を明らかにする「価値分析過程」と、当該の価値判断を批判的に検討する「価値吟味過程」からなる。「価値分析過程」は①社会的現象および社会的判断についての事実認識、②事実認識の背後にある価値判断の明確化、③価値判断の相対化からなる。①社会的現象および社会的判断についての事実認識では、人・もの・こと、あるいは社会的判断・

政策についての事実認識を行うものである。一般的な説明的知識の獲得がめざされる。そして②において、事実認識の背後にある価値判断について認識する。これは「何を大切にしているのか」「何を重視していると言えるか」「何を正しいとするのか」という問いに対する答えとして明らかになる。③価値判断の相対化では、②で確認した価値判断とは異なる判断に規定される人・もの・ことや社会的判断・政策について認識する。その社会的意義を追求し、②の価値判断と比較することで、価値判断は絶対的なものではなく私たちの選択によって当該の価値判断に基づく制度、政策、社会的判断は変化しうるものであることを認識することが目的となる。

「価値吟味過程」は、「価値分析過程」で明らかとなった価値判断に基づく社会的現象や判断を自分なりに評価し、他者の評価と比較・調整したうえで価値判断について再評価を行うように構成される。「価値分析過程」において認識した複数の価値判断が、優先されたり制限されたりする場合の検討を通して、自らの判断基準を再構成するのが「価値吟味過程」のねらいとなる。それは、①社会的現象や判断に関わる価値判断についての現状の把握、②価値判断についての評価、③他者の評価との比較による価値判断の再吟味、④価値判断の再調整の四段階となる。①では、それぞれの価値判断に基づく社会的現象や判断の現状を確認し、②の段階では、価値判断に対する子ども自身の評価を促すものである。③の段階では、学級の他の子どもの評価と比較することで、特定の価値判断が優先されたり制限されたりする場合を考慮しながら、自分の評価を再吟味していく。以上の段階を経て、④で価値判断の再評価を行うのである。

価値判断を問う学習や、合意形成学習、および意思決定学習においても共通するのは「価値吟味過程」であろう。方法は微妙に異なるが、異なる価値判断に対して評価を下す、あるいは社会問題に対して意思決定を行う、調整を行うという主体的な学習活動を伴うものである。

しかしながら、近年これらの学習について次のよう



【図1 民主的価値の実体化の過程（著者作成）】<sup>(3)</sup>

な問題点が指摘されている。

子どもが属する現実の社会的、文化的文脈、および彼らが持つ既存の社会認識を無視した合意形成学習、意思決定学習は「遠い国のお話」「大人の世界の話」「授業だけに通用する形式的な意思決定」に陥りがちである<sup>(2)</sup>。

いわゆる「きれいごと」が、交わされる授業であろう。例えば、「原発問題」についての討論学習において、原子力の危険性の有無や環境への負荷が論点としてあげられるが、それはしばしば理想論に陥り、そこで生きて生活する人々のリアリティが感じられない。原子力発電の有無は環境や健康・生命だけでなく、わたしたちが日々実感する経済活動への影響への考慮なくしては解決できない問題である。理想論のみを掲げた結果、「原発は反対だし、電気料金が値上がりするのいやだ」といった矛盾する意思決定がなされるのである。

子どもの社会認識過程を十分に保障しない、合意形成学習、意思決定学習はしばしば、子どもの日常的な知識の範囲にとどまり、現実的な判断に結びつかない。

授業で交わされる意見が、子どもの日常的な経験の範疇を出ないという経験は現場の教員なら一度は経験したことがあるのではないだろうか。「社会認識過程において社会諸科学の成果を取り入れ、『なぜ』疑問を駆使し、授業を展開したはずなのに、そこで獲得されたはずの知識が意思決定過程で生かされない」「子どもが意思決定の根拠としてあげるのは、日常的な知識に終始する」。このような状況が生じるのは授業で提示した知識が子どもたちに十分におちていない証拠である。

以上の点から、著者は、子どもの自主的自立的な価値観形成を保障するには、価値判断や合理的意思決定の過程を重視するだけでなく、社会の中で構成された枠組みとしての知識を相対化する「価値分析過程」、より一般的な言い方をすれば「社会認識過程」の在り方を見直す必要があるのではないかと考える。本研究では、社会認識過程を、日常生活における実践・行為が埋め込まれている文脈を認識する過程と、自明視さ

れてきた文脈を相対化する過程として提案したい。結論から言えば、認識過程は社会化の過程である。相対化の過程は対抗社会化<sup>(4)</sup>の過程である。この相反する2つの過程を授業過程に取り入れることで、子どもは自らが持つ既存の価値観を見直し、再構成していくことが実践の結果明らかとなった。

本研究では、この2つの認識過程を取り入れた自主的自立的価値観形成をめざす授業についての実践例を示し、小学校における価値判断学習の指針としたい。

## 2. 対抗社会化のための社会化

民主主義社会において、私たちは自己の意思に従い、主体的に判断し自由に行動しているように見える。しかしながら、山田は「人々は自発的に行為を選び取っているように見えながら、結果的には当該カテゴリーの及ぼす社会統制に従属し、自分のアイデンティティに縛り付けられているのである」<sup>(5)</sup>としている。カテゴリー化による社会統制とは「自己を主体化すると同時に従属化する権力のテクノロジー」<sup>(6)</sup>であろう。私たちは当該社会の枠組みに沿って、事実をとらえ判断し、自らもまたその枠組みにそって行動している。そこにひずみや矛盾が生じれば、「なかったもの」として無視したり「自分たちとはちがうもの」と排除しようとする。あるいは「自分さえがまんすればうまくいく」と自分を抑えたりもする。私たちが本当の意味で主体的であるためには、このカテゴリー化という枠組みの鎖から、自己を解き放たなければならない。そのため、社会科における社会認識過程は基本的に対抗社会化が貫かれる必要がある。対抗社会化によって、行為や現象が埋め込まれている文脈の自明性をより効果的に解体するためには、まず自己の行動が埋め込まれている社会の在り様—実践共同体の文脈や行動の枠組みといったもの—を認識する必要がある。いわば対抗社会化のための社会化である。

民主主義社会に生きる市民にとって必要であるのは、特定の価値を教え込むのではなく、「一人ひとりが既存のイデオロギー、権威づけられた価値観に頼ることなく、社会の個々の問題について熟慮し、自主的自立的に考え、判断していく」能力を育成する社会科教育である<sup>(7)</sup>。溝口が「子どもの自主的自立的な思想形成

を図るには、社会についてのものの見方や考え方、行動様式に至るまで、社会の側からイデオロギーを子どもに押し付けてくる社会化の圧力に対抗していく必要がある<sup>(8)</sup>と述べているように、開かれた社会認識形成を保証しようとする社会科教育論は、一人一人の思考の独自性を保障しない「理解主義」の社会科授業、すなわち子どもの社会化を目的とする授業を批判してきた。しかしながら、対抗社会化の論理を小学校社会科授業にそのまま取り入れるには無理がある。なぜなら、小学生児童、特に低・中学年児童は「社会化」過程が途中段階にあるからである。極端な例を言えば小学生児童は家族がスーパーで日常的にどんなものをどの店で買っているか知らない。あるいは、お店の人は自分で作ったもの（特に農作物）を売っていると考えている。火事になったときに消防車が来るのは知っているが、消防車に積んだ水のみで火を消すと思込んでいる子どももいる。そのように自分を取り巻く日常生活がどのような社会システムの上に成り立っているのか、認識していない子どもに、「あなたの生活はそれで正しいと言えるのですか」と問うても答えることはできない。あるいは、そのような認識の上で社会問題について論争しても、ニュースや新聞等のメディアからの受け売りの「きれいごと」や、常識的な知識がはい回るだけの議論に終わるのではないだろうか。

このような意味から、社会化の圧力に対抗し、小学生児童に自主的自立的な価値観形成を保障するには、まず社会化の過程が必要であることを主張したい。社会化過程において、問題であるのは特定の価値を教え込むことである。社会化の過程で身に着けた価値を一旦対象化し、吟味する活動を保障することで、その問題点は解消される。そこで、どのように価値を相対化していくのか、第4学年単元「ごみの処理とわたしたちの生活」の実践をもとに述べていく。

### 3. 「社会化」のための実践的理解

著者は対抗社会化のためには、まず社会化に徹底して取り組むべきであるという立場に立ち、正統的周辺参加論に基づく実践的理解の手法を用いて授業実践を行った。第4学年単元「ごみの処理とわたしたちの生活」を例に、授業における対抗社会化のための社会化過程について提案したい。


正統的周辺参加論とは、知識を社会的環境における関係性、枠組みであると定義づけ、知識の認識過程を理論化した学習論である。正統的周辺参加論という「学習」とは、学習主体が実践共同体の正式メンバーとして実際の活動に参加し（周辺参加）、そこへの参加の形態を徐々に変化させながら、より深く実践共同体の活

動に関与するようになる（十全参加）過程のことである<sup>(9)</sup>。つまり、自分の身体を通してローカルな状況に入り込み、参加の形態を徐々に変化させていくことによって、実践を可能としている共同体のコンピテンスを獲得するのである。

第4学年単元「ごみの処理と私たちの生活」では、「ごみ出し1週間」の取り組みを実施することで、子どもを地域のごみ処理システムにいわば「周辺参加」させた。そこからごみ処理の参加の形態を、主に見学・体験を通して徐々に変化させていくことで、地域のごみ処理システムに関わるコンピテンスを習得させることを目指した。その学習過程を表したものが図2である。

立場	獲得される知識
ごみ処理場	・ごみは環境に配慮しながら効率的に処理されている。
ごみ収集車	・ごみは種類によって行く場所が異なる。 ・地区によって集めるごみの種類を分けることで効率的に収集できる。
ごみ出し	・ごみは分別して出さなければならない。 ・曜日によって出すごみはちがう。

十全参加



周辺参加

【図2 第4学年単元「ごみの処理とわたしたちの生活」の学習過程】

子どもたちは「ごみ出し1週間」の取り組みを行うことで、ごみ出しのルール「ごみは分別しなければならないこと」「曜日によって出すごみをわけなければならないこと」「水をきって出さなければならないこと」「名前を書いて出さなければならないこと」「決められた時間までに出さなければならないこと」等について実感をともなって理解した。子どもたちが「ごみ出し1週間」に取り組んだ感想の一部を示したのが表1である。ごみ出し経験のない子どもたちがほとんどであったが、実際に体験してみると、ごみ出しにはいろいろな細かいルールがあることを理解した。子どもの率直な感想は「重い」「くさい」「朝はやくに出さないといけないからたいへん」「ごみを出す日をまちがえたらやり直しになるからたいへん」等であった。概してマイナス的のものが多かった。そこで「なぜごみを9種類も分別しなくてはならないのか」「なぜ曜日によって出すごみを種類が違うのか」という課題を設定し、ごみ収集車の見学を行った。実際にごみが収集車に回



【表1 「ごみ出し1週間」の感想（一部抜粋）】

番号	感想
6	ゴミ出しをするときは8時30分までに出さないといけないので早く起きて出さなければいけないのがわかった。赤ちゃんのおむつがあるから週に2回出さないといけないからお母さんはたいへんだと思った。
10	缶はリサイクルできるものが多くなってごみに出す量が少しへって、とても軽くて、かんとびん・古紙といっしょにもてるぐらい軽くて運びやすかったです。9/14は燃やせるごみを7時30分に出したけどとても重くて大きい袋でだすときにおばあちゃんに手伝ってもらわないとできなかったのが家族の人はこんな重い物をいつも捨てて出すからありがたいことだな、と思いました。
12	家が近所の友だちは出すごみの種類は同じでした。遠いところに住んでいる人は出すごみの種類がちがっていました。
13	生ごみがたくさんあったからとてもくさかった。ビンを出す日はビンがたくさん入っていたから燃やせるごみより重かった。
20	お父さんは月と木が燃やせるごみだと言っていたけど、先生のところは火が燃えるゴミなので場所によってちがうんだと思いました。よく考えてみるとペット・プラが一番多かったと思います。昨日の燃やせるごみ袋は1袋で今日のペット・プラは4袋あったからです。買った食材でつくるからペットプラが多いと思いました。朝出すごみはカレンダーをみて出してまちがえたらやり直しなのですごく大変だなあとと思いました。
21	ゴミ出し一週間をしてみてわかったことは燃やせるごみが重かったことです。意外と軽そうにみえたけどごみを出すときに苦勞することがわかりました。それと他の地域と出すごみがちがったことです。私はペットプラだったけど、他の地区ではびんなどだったのでびっくりしました。ごみステーションにあみがしてありました。おもりもついていました。なぜあみがしてあるのかを考えたら動物（ねこ・鳥・からす）が荒らすからだと思う

収される様子を見学したりごみ収集についての話を聞いたりすることで子どもたちは、「ごみは種類によっていく場所が異なること」「地区によって集めるごみの種類をわけることで効率的にごみが回収されていること」を理解した。表2はごみ収集車の方への、子どものお礼の手紙の一部である。

記述を見ると、ごみ出しについての否定的な意見（「重い」「くさい」「曜日ごとにかけて出すのがたいへん」等）が「ごみ袋に名前をきちんと書くようにしよう」「違反ごみを出さないようにしたい」「8時30分からお昼過ぎまでごみを集めているからたいへん」等、「～だから～しなければならない」という規範的なものに変わりつつあることがわかる。ごみ収集車の見学後の話し合いでも、「ごみ収集車がごみ袋をつぶすときすごくくさいにおいがした。くさいしるがたくさん出ている。水をきちんときって、ごみを出さなければならぬと思った」「浜田市に1130か所もあるごみステーションを全部回ってごみを集めるのはたいへん。ごみが多いときは何往復もするときに、ごみをへらさなければならぬと思った」等、ごみを出す立場からだけではなく、ごみを集める立場に立ってごみ処理について考え始めていることがわかった。子どもの「社会化」が進んでいる証拠であろう。

【表2 ごみ収集車の方への子どものお礼の手紙（一部抜粋）】

番号	主な内容
6	ごみ収集車の人はいつもくさいごみをとっている一人は走って次のところまでいかなければならない。ごみ収集の仕事はすごくたいへんそうだな、と思った。
10	ごみ収集車はごみをいれるだけでなく、つぶして水をしぼっている。なぜ水をしぼるのかな。
12	鳥に荒らされて掃除をするのは時間がないのに大変。燃やせるごみは重いから大変。
13	ごみも集めて掃除もするのは大変。ごみ収集車の人はつかれるだろうなと思った。これからも忘れずに名前を書いてごみをだしたい。
4	回るのがたいへんなのにいはんごみがあったらいやになると思う。ぼくもこれからはんごみを出さないようにしたい。
2	曜日や日付をまちがえないようにごみをきちんとだしてめいわくにならないようにしたい。

さらに、ごみ処理施設の見学を通して、この傾向は顕著になる。ごみを加熱して処理する「エコクリーンセンター」、資源ごみを分別し、整理する「リサイクルセンター」の見学を通して、「ごみを分別するのは、環

境に配慮して、効率的にごみを処理するためである」という知識を獲得した子どもたちは、「ごみをあらって分別してエコクリーンセンターのみなさんやリサイクルセンターのみなさんが大変にならないように分別したほうがいいと思う」「危険物のごみはあまり出さないで使えるごみは使った方がいいと思います。危険物はもやしたりできなくて土にうめることになってしまうので未来はもしかしたら近所にうめることになるかもしれないから。それにもって運ぶときもいっぱい運ぶと重くなってたいへんになるから」「ごみをつぶしやすいようにごみを少なめにしておこうと思った。ごみを少なめにしたら収集の人もつぶせて次の場所にすぐいけるし、少なめにすればすぐつぶせるから処理も簡単にできると思うから。」等、「ごみ出し」という自己の行動を「地域のごみ処理システム」という文脈から考えることができるようになった。そこにはごみ出しについての否定的な意見（「重い」「くさい」「めんどくさい」）はない。「ごみ処理に関わる人々が、環境に配慮してよりよくごみを処理するためにがんばっておられるのだから、自分たちも協力しなければならぬ」という考えにとって替わられている。まさに正統的周辺参加論でいう「十全参加」の状態であろう。このごみ処理システムの背後にあるのは「エコの重視」「環境の重視」「持続可能な社会の重視」という価値である。子どもたちは、自分の身体を通してローカルな状況に入り込むことによって、これらの不可視の価値観を無意識のうちに獲得した。そこには、「本当に環境を重視することが私たちの幸福につながるのか」「誰にとっても平等な正義といえるのか」という価値の吟味はない。このような価値観を身につけた子どもたちは自らがきちんとごみ出しをするだけでなく、やがては、きちんと袋に名前を書いていない行為や曜日を守らない行為、違反ごみ等の行為を「反社会的な行為」として、排除しようとするようになるかもしれない。

#### 4. 価値の相対化（対抗社会化）の過程

##### （1）異なる社会システムとの対比

判断基準をまだ明確にとらえることが困難な小学校中学年の初期段階では、「人・もの・こと」を比較することで見方・考え方の多様性に気づくことを対抗社会化のねらいすべきである。そこで、第4学年単元「ごみの処理とわたしたちの生活」では、浜田市とは異なるごみ分別システムをとる水俣市を取り上げることで、社会化の過程で自明視されていた「エコの重視」「環境の重視」という価値を相対化することをめざした。

水俣市では、公害である水俣病のような不幸な出来事を二度と繰り返してはならないという考えのもとに

「環境モデル都市づくり」を宣言し、まちづくりを進めている。その一環として家庭ごみの減量を図るため、ごみの22分別を実施し徹底してごみの資源化、リサイクルに取り組んでいる。資料1は水俣市のごみの22分別である。水俣市のごみのリサイクル率は44.8パーセントであるのに対し、9分別の浜田のリサイクル率は25.3パーセントである。

【資料1 水俣市のごみの22分別】

生きびん（リターナブルびん）	蛍光管・電球類	新聞・チラシ	粗大ごみ・破砕・埋立
雑びん（透明）	乾電池類	雑誌・その他紙類	生ごみ
雑びん（茶色）	電気コード類	ダンボール	燃やすもの
雑びん（その他色）	小型家電	布類	
アルミ缶	ペットボトル	容器包装プラスチック	
スチール缶	ペットボトルのふた	食用油	

この数字だけみると、「環境のためには、たくさん分別したほうがよい」と思いがちだが、ごみの分別には次のような検討すべき点もある。

- ごみ減量の取り組みは住民の意識や協力度、各自治体におかれた施設などおかれた状況を直視しながら、検討する必要がある。
- リサイクルを進めるにしてもそれにかかるお金とそれによって得られる効果（ごみ減量、環境負荷の低減など）を比較衡量することが大切である。

ごみを分別すればするほど家庭では手間がかかる。その手間に見合う効果が期待できるのか（環境の重視と効率性の調整）、またそれを住民が納得し、行政と協働できているのか、という問題がごみの分別にはつきまとう。

実際の授業では、総合的な学習の時間の「川を調べよう」の学習とリンクして、水俣市の22分別の取り組みについて学習した。水俣病についての概要を説明した後、「なぜ水俣市は22分別を行っているのだろう」と問いかけた。子どもたちは前時までの学習から獲得した知識「できるだけたくさんの分別をすると作業をする人が処理しやすくなり、多くのごみがリサイクルしやすくなる。そのため、廃棄するごみが減り、環境の保護につながる」を活用し、「水俣病のときのように

海を汚したくないから」「環境を大切にしたいから」「自然をこわしたくないから」と推測した。その上で「みなさんは、浜田市ももっと分別をしたほうがよいと思いますか。それとも今のままでよいと思いますか」と問いかけた。

「今のままでいい」が13人、「もっと分別したほうがよい」が9人、「まよっている」は7人という結果だった。それぞれの意見は以下のとおりである。

#### 【今のままでいい】

- もっとふえたら2種類も家に（ごみを）おかないといけなからです。それにビニール袋（有料ごみふくろ）が高いからです。ごみ袋が無料でも出す人はたいへんだし、エコクリーンセンターみたいな処理する場所を増やさなくてはならないのでぼくは今のままでいいと思います。
- 水俣市のようにあんなに分けるとごみの分別がたいへんになったり、毎日ごみをださなくてはいけなくなる。
- 今のままにしないとごみ収集の人がどこに何があるのか迷うので今のままでいいと思います。また水俣市みたいにいっぱいがあると危険物とか有害物とか、違反ごみが多くなると思います。
- もっとごみの種類を増やしたら作業する人がたいへんになるからぼくは今のままでいいと思います。
- 水俣市のようにごみの種類がたくさんあると家にごみぶくろがたくさんあって、どのごみぶくろかわからなくてこまってしまうからです。お金もたくさんかかってしまい、ごみ袋だけでお金がなくなるかもしれないからです。作業する人は機械を使っているから分別をそんなにしなくてもいいと思いました。今のままでごみを出す人も楽だと思います。
- 2種類のごみ袋をかっていたらよけい環境によくないし、ごみ袋を22こも家においていられないし、家の中がくさくなるからです。水俣市は浜田と違ってちゃんとわけていてリサイクルしてくれるけど、9種類の方が楽だからです。
- 2種類のごみを探すのもたいへんだし、ごみをごみステーションまで運ぶのもつかれるからです。

\_\_は個人の効率性（楽・手間、お金がかからない）\_\_はごみ処理システムの効率性に関わる意見である。すなわち、「今のままでいい」とする子どもたちは個人やシステムの効率性（便利さ・負担の減）を重視しているのである。また、\_\_のようにごみを分別しないことがかえって、環境のためによいのではと主張する意見も出た。

#### 【もっと分別をしたほうがよい】

- 浜田市は半分もリサイクルできていないからです。たくさんごみを分別することはたいへんだけどたくさんのがリサイクルされ、埋め立て地も減るなら私はもっと分別したほうがよいと思います。
- 今のままは分別するのが楽だけどふやすとリサイクルするものが多くできるから、便利なものがいっぱいできるからです。
- 未来のためにもごみをできるだけ分別するとかんきょうがよくなるからです。もしこのままごみを9種類だけ分けたままだともしかしたら未来の環境が悪くなって生活しにくくなるかもしれないからです。水俣市みたいに2種類もごみをわけなくても、2, 3種類のごみはもうちょっと分別したほうが私はいいと思います。
- 浜田市は9しか分けていなくてリサイクルできる量が少ないので、水俣市を見習って環境や自然をこわさず、未来でも山などが残っていてほしいからです。
- 浜田は100トン中25トンしかリサイクルできていないから他の75トンもリサイクルできていないからです。それにくらべて水俣市は100トン中50トンもリサイクルされているので、浜田ももうちょっと多くの種類にわけた方がよいと思います。未来のことを考えると私はこっちのほうがよいと思います。
- 分別したらたくさんリサイクルできるからです。ごみを埋めたら環境に悪いからです。ごみを埋めたら木も草も生えないからです。
- 処理する人が楽になるし、その分リサイクルしやすくなるからです。環境もよくなるし、未来のことを考えると分別する方がよいと思う。

「もっと分別したほうがよい」の子どもは、「埋立地が減るならもっと分別したほうがよい」「未来のことを考えると」など環境や持続可能性を重視していることがわかる。また\_\_のように、「22種類まではいかなくても2, 3種類は増やしてもいいかもしれない」と「もっと分別」と「現状維持」の間の調整を図っている子どももいた。

#### 【まよっている】

- ごみを出すのは、めんどくさいけど、分別したほうがもっとごみをリサイクルできるからです。
- ふやしすぎたら、出すのがたいへんだし、今のままでもいいけど、環境が悪くなるのは嫌だからです。
- 浜田市はこのままでもきれいだと思うし、分別するよりエコクリーンセンターやリサイクルセンターの人たちがごみがまとまっている方がよいし、分別するごみが多いと大変だと思うからです。でも水俣市



ではいっぱい分けるのはたいへんだけどリサイクルしやすいし、環境をきれいにするのもいいと思うし、ごみを処理する人が楽にできるのでいいと思います。だから私は迷います。

- 分別を多くした方が環境によくて、でも水俣市みたいに22種類も分別をするのは大変だからです。それに22種類も多したら1週間にできないごみの処理があるからです。
- 水俣市は病気がはやっていたからいっぱい分けているけど、浜田市は病気がはやっていないから今のままでいいと思った。でも少しでもいっぱい分けて浜田がきれいになるなら、いっぱいわけた方がいいと思いました。だから私は今のままでも、もっと分別してもどちらでもいいんじゃないかと思いました。
- わたしたちが楽だからもっと分別するのはいやだからといって、エコクリーンセンターやクリーンセンターの人たちにまかせておくと作業する人が大変だけど、わたしたちがたくさん分別すると袋が何色かわからなくなります。今のままでも、もうすこし分別する量を増やしても、リサイクルセンターの人たちかわたしたちかどちらかが大変な思いをしなければならぬのでまよっています。

「環境の重視」と「効率性（便利さ）の重視」の間で意見を決めかねていた子どもがほとんどである。また、「浜田は病気がはやっていないから」「浜田はきれいだから」等、環境への負荷を減らす必要を感じていない子ども、「今のままでも、もうすこし分別する量を増やしても、リサイクルセンターの人たちかわたしたちかどちらかが大変な思いをしなければならぬのでまよっています」のように、環境負荷への負担を、誰が負うのかという問題に言及している子どももいた。

具体的に水俣市では、どのように22分別しているのか（ごみの分け方、出し方、回収の仕方）、分別したごみはどのように処理・リサイクルされているのか学習する時間がなかったため、子どもの意見は想像の域を出ていない面もあるが、自分たちの市（浜田市）と水俣市のごみ処理システムの違いを比較することで、社会化の過程で自明視していた「環境の重視」という価値を「効率性の重視」という価値から相対的にとらえることができた。子どもたちから「効率性の重視」の価値に基づく意見が出たのは、「ごみ出し1週間」の取り組みや、ごみ収集車や処理場の見学という経験に拠るところ多い。「ごみを出すのはたいへんだ」「ごみはくさい」「曜日によって分けて出すのはめんどくさい」あるいは「違反ごみがあると処理する人が苦労する」という事実を、実体験を通して理解しているから

【資料2 第4学年単元「ごみの処理と私たちの生活」授業書

	発問	資料・体験	児童の獲得する知識
価値分析	○みんなは普段ごみをどのように処分していますか。	①浜田市のごみ分	・ごみをふくろに分けて捨てている。 ・ごみステーションに捨てている。
	○浜田市ではごみを何種類に分けて捨てているので		・燃やせるごみ、ペットボトル・プラスチック製包装紙、燃やせないごみ、缶、びん、古紙、古着

切さに気付くことができたと言える。


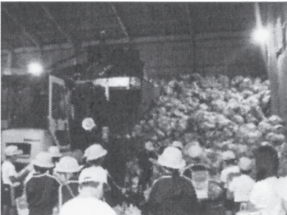
市町村によってごみ処理システムが異なることを知った子どもから「ごみの分別の仕方は誰が決めるのですか？」と質問が複数出た。「それぞれの市町村で話し合って決めるんだよ。つまり、みんなも大人になったらどうしたいか、考えなくてはいけないんだよ」と話すと、「それはたいへんだ」とように引き締まった表情になった。「ごみの分別」という自分たちに直接かわる日常的な行為が、どのように決められているのか、関心をもったために出た質問であろう。

### 5. 小学校社会科における「社会化」の意義


第4学年単元「ごみの処理と私たちの生活」は事実認識の背後にある価値判断を明らかにする「価値分析過程」と、当該の価値判断を批判的に検討する「価値吟味過程」をもとに、地域教材と子どもの実態を調整しながら、実践した授業である。したがって、授業にあたってあらかじめ授業計画（単元計画）は設計していない。授業を教授書にまとめると資料2のようになる。

著者は、自主的自立的な価値観形成を保障する小学校社会科授業の具体的な到達目標は、中学年から高学年に向けて、多様な見方・考え方の認識、多様な判断基準の認識、自己の判断基準の再構成、具体的状況に応じた判断基準の調整と発展していくものであると捉え、授業開発を行ってきた。

第4学年単元「ごみの処理と私たちの生活」では特に、多様な価値判断基準の認識、自己の価値判断基準の再構成をめざして、授業に取り組んだ。単元「ごみの処理とわたしたちの生活」では、子どもたちはごみ処理に関わる「効率性の重視」と「環境の重視」という、相反する価値に基づいてごみ処理システムは構築されていることを理解し、互いの価値を踏まえながら「もっと分別するべきか否か」意思決定することができた。授業記録を見ると、ほとんどの子どもたちが学習で獲得した知識をもとに、意思決定をしていることがわかる。また、それぞれの意見は「きれいごと」「教室の中だけ通用する意見」ではなく、地に足のついた現実的なものである。これは授業過程に「社会化」と「対抗社会化」という、相反する学習過程を取り入れたことによる。もっとくわしく言えば、「対抗社会化」をより効果的に達成するための手段として「社会化」を位置づけたためである。「社会化」の意義として、次の点をあげることができる。

	発 問	資料・体験	児童の獲得する知識
価値分析過程 ①社会的 事象および 社会的判断 についての 事実認識 社会化の過程	・これまでの学習で考えたことを書きましょう。  ◎なぜ、曜日によって出すごみが違うのでしょうか。なぜ、ごみを分けてださなくてはならないのでしょうか  ○なぜごみは種類によって行く場所が違うのでしょうか。		・1130か所もあるごみステーションを全部回るのはいへんなので、地区ごとに曜日によって集めるごみを変えている。ごみ収集計画を立てるのは市役所である。 ・8:30から仕事をはじめて全部ごみを集めるまで昼過ぎまでかかる。エコクリーンセンターまで5往復することもある。 ・ごみの種類によってもっていく場所が異なる。 ・違反ごみは回収しない。ステッカーをはって残す。
	○それぞれのごみはどこに行くのでしょうか。主なごみの行き場所について調べましょう。   【エコクリーンセンターの見学】   【リサイクルセンターの見学】	④浜田市のごみ出しカレンダー  ⑤エコクリーンセンター、リサイクルセンターの見学	・ごみ収集車のごみ袋をつぶすときすごくくさいにおいがした。くさいしるがたくさん出ていた。水をきちんときってごみを出さなければならぬと思った。 ・浜田市に1130か所もあるごみステーションを全部回ってごみを集めるのはいへん。ごみが多いときは何往復もするときいて、ごみをへらさなければならぬと思った。 ・違反ごみがでると、ごみ収集車の人にも地域の人にも迷惑がかかる。きちんと分別して出さなければならぬと思った。  ・1130か所もあるごみステーションを全部回るのはいへんなので、地区ごとに曜日によって集めるごみを変えている。効率的にごみを集めるため。 ・ごみは種類によって行く場所が違うのでごみを分別している。  ・ごみの処理の仕方がちがうのではないか。  ・燃やせるごみと粗大ごみはエコクリーンセンターに行く。 ・ペットボトル、プラスチック製包装容器はリサイクルセンターへいく。 ・燃やせないごみは不燃物処理場に行く。  【エコクリーンセンター】 ・ごみ収集車によって集められたごみはプラットホームからごみピットに捨てられる。 ・大きなクレーンでごみピットのごみをかきまぜ、燃えやすく（溶けやすく）する。 ・コークスを使って1600度まで温度を上げ、集められたごみを溶岩のように溶かす。 ・溶かされたごみは水で冷却され「スラグ」と「メタル」に分けられる。 ・「スラグ」は黒い粒で、アスファルトやコンクリートの材料になる。「メタル」は金属製品に再利用される。 ・ごみを燃焼したときに発生する熱は電気に利用される。エコクリーンセンター内の電力はすべてこの「ごみ発電」でまかなっている。 ・排気ガスを出さないように細心の注意がはらわれている。 ・残った灰は最終処分場で埋められる。 【リサイクルセンター】 ・ペット・プラごみはすべて人の手で分別され、リサイクル工場へ運ばれる。 ・ペット・プラごみは工場でペレットという細かい粒になりそこから服やプラスチック製品に生まれ変わる。



	発問	資料・体験	児童の獲得する知識
<p>価値分析過程 ①社会的現象および社会的判断についての事実認識 社会化の過程</p>	 <p>【リサイクルセンターの見学の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>燃やせないごみはどのように処分されているのでしょうか。</li> <li>○ごみはなぜ分別しなくてはならないのでしょうか。</li> <li>リサイクル以外にごみを減らす方法はないだろうか。</li> <li>「ごみの旅」を3年生に発表して、ごみの分別やリデュース、リユースの大切さを伝えよう。</li> </ul>	<p>⑥燃えないごみのゆくえ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>缶はアルミ缶とスチール缶に分けられアルミ・鉄製品や再生缶に生まれ変わる。</li> <li>ビンはわれてないビン（リターナルビン）とわれているビンにわけられる。また色によっても分けられる。</li> <li>キャップやビンについているシールはすべてとらなくてはならない。</li> <li>リターナルビンは洗ってそのまままたビンとして使われる。</li> <li>われているビンはいったん粉々にされ（ガレット）再生ビンとして生まれ変わる。</li> <li>ごみ袋にかみそりが入っていてけがをしたこともある。</li> </ul> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> <li>集められたごみは破砕機で細かく砕かれる。</li> <li>強力な磁石を使ってごみの中から鉄を集める。</li> <li>どうしてもリサイクルできないごみは最終処分場で埋められる。</li> <li>自然を汚したり人々の健康をおかしたりしないように、汚れた水をきれいにする施設もある。</li> </ul> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> <li>できるだけたくさんの分別をすると作業をする人が処理しやすくなり、多くのごみがリサイクルしやすくなる。そのため埋め立てのごみが減り環境の保護につながる。</li> <li>むだを出さないでごみを減らすこと（リデュース）、繰り返し使うこと（リユース）が考えられる。</li> </ul> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> <li>私は物をざつに使わないで、いらぬ物は買わないでごみをあまり出さない方がいいと思います。みなさんもぜひやってみてください。</li> <li>ごみを出す人も、集める人もいやな気持ちにならないように、「ごみカレンダー」をよく見て違反ごみをぜったいに出さないようにしたいです。</li> <li>ごみを集める人も出す人も大変な目にあわないように、使えるものはちゃんと使ってから捨てた方がいいと思います。</li> <li>私は、ごみはあらって分別してエコクリーンセンターのみなさんやリサイクルセンターのみなさんが大変にならないようにした方がいいと思います。</li> </ul>
<p>②事実判断の背後にある価値判断の相対化</p>	<p>○浜田市は9分別していましたが、水俣市は22分別しています。それはなぜだと思いますか。</p> <p>・浜田市のごみのリサイクル率は約25パーセントです。浜田市も水俣市のようにもっと分別をしたほうがよいのでしょうか。それともこのままでいいのでしょうか。自分の考えを発表しましょう。</p>	<p>⑦水俣病はなぜ起こったか ⑧水俣市のごみ22分別</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>水俣市は22分別することで、ごみの約半分をリサイクルできる。</li> <li>水俣市は工場の流した排水が原因で水俣病がおこった。もう2度と環境を汚したくないという思いからごみの22分別をしている。</li> </ul> <p>【このままでいい（効率性の重視）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>もっとふえたら22種類も家に（ごみを）おかないといけない。それにビニール袋（有料ごみふくろ）が高くなる。ごみ袋が無料でも分別して出すのはたいへんだし、エコクリーンセンターみたいに処理する場所を増やさなくてはならないので今のままでいいと思います。</li> </ul> <p>【もっと分別したほうがいい（環境の重視）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>浜田市は半分もリサイクルできていない。たくさんごみを分別することはたいへんだけどたくさんのがリサイクルされ、埋め立て地も減るならもっと分別したほうがいいと思う。</li> </ul>

	発問	資料・体験	児童の獲得する知識
	○「楽にごみを処理できるの がいいか」「環境を大切に してごみを処理するのが いいか」2つの間で迷っ ているような気がします。 どちらを大切にしたいほう がいいのでしょうか。自分 の意見を書きましょう。		【まよっている】 ・浜田市はこのままでもきれいだと思うし、分別するごみ が多いと大変だと思う。水俣市ではいっぱい分けるのは たいへんだけどりサイクルしやすいし、環境をきれいに するのもいいし、ごみを処理する人が楽にできるのでい いと思う。だから迷っている。

#### ①当事者意識をもつことができる。

単元「ごみの処理とわたしたちの生活」では、子どもたちに「ごみ出し1週間」という「周辺参加」から、「ごみ処理場の見学」という「十全参加」の過程を辿らせることで、一定の価値判断に基づく文脈から「ごみ処理」という社会的事象を理解することができた。このように自分の身体を通してローカルな状況に入り込むことによって、実践を可能としている共同体のものの見方、考え方をより「自分に関わること」として理解することができる。

#### ②社会的事象が埋め込まれている文脈を探ろうとする態度を養う。

自分たちの日常生活のありようが、ある一定の価値判断に基づく文脈に埋め込まれていることを理解した子どもたちは、自分たちとは異なる生活様式に出会ったとき、「異端」として排除しようとするのではなく、その背後にある文脈を探ろうとするだろう。実際、水俣市のごみの22分別を知った子どもたちは「なぜだろう」と疑問を抱き、積極的に学習に取り組んだ。このことから、「社会化」を徹底して行うことは、「対抗社会化」にも有効に働く、と言えよう。

### 6. 本研究の成果と課題

子どもの価値観形成にまで踏み込む、授業理論研究はこれまで多く提案されてきた。しかし、これらの授業の多くは、社会問題に対する合理的意思決定、価値判断等、価値の吟味・判断過程に重点が置かれ、そのまま実践したとしても、子どもに十分に自主的自立的な価値観形成を保障するにはいたらないケースも多い。著者は授業理論をどのように実践し、子どもの自主的自立的価値観形成を保障するのか、本研究を通して明らかにしてきた。

具体的には、子どもの自主的自立的な価値観形成を保障するには、価値判断や合理的意思決定の過程を重視するだけではなく、社会の中で構成された枠組みとしての知識を相対化する「価値分析過程」、より一般的に言えば「社会認識過程」の在り方を見直す必要があ

るのではないかとこの考えに立ち、その方法として「対抗社会化のための社会化」を提案した。

本研究の成果として以下の点をあげることができる。1つは「特定の価値を注入するもの」として、否定されてきた社会化過程の意義を再評価したことである。社会科教育研究では否定的な、「共感的理解」をめざす社会科授業は現在も小学校教育現場で一般的に行われている<sup>(10)</sup>。これが研究と実践の乖離の一因にもなっている。子どもの価値観形成の面から「社会化」の過程を見直すことは、現場と研究の連携の可能性を示唆するものである。

もう1つは、価値観形成のための社会認識過程の在り方に光を当てたことである。事実と価値の一元論を基盤とする社会科授業は、とすれば、「社会問題ありき」「討論ありき」の学習となり、自分自身が置かれている状況や文脈を理解しないまま、新聞、テレビ、インターネットなどメディアから得た情報、あるいは自分の経験知をもとに論を展開するものも多い。子どもの自主的自立的な価値観形成のためには、自らの生活を規定する不可視の価値を白日の下にさらけ出し、批判・吟味する必要がある。そのためには対抗社会化を取り入れた、社会認識過程が必要不可欠である<sup>(11)</sup>。

この「対抗社会化のための社会化」を取り入れた社会認識過程を、どのように小学校社会科授業に具体化していくかが、今後の課題である。

#### 【引用文献】

- (1) 山田富秋『日常性批判 シュッツ・ガーフィンケル・フーコー』せりか書房、2000年、p. 21.
- (2) 田中 伸「コミュニケーション理論に基づく社会科教育論—「社会と折り合いをつける力」の育成を目指した授業デザイン」『社会科研究』全国社会科教育学会、83号、2015年、p. 2.
- (3) 紙田路子(2016)「自主的自立的な価値観形成を目指す小学校社会科の授業構成—第5学年小単元「水俣病から考える」の開発を事例として」全国社会科教育学会『社会科研究第84号』、p. 19.
- (4) 「対抗社会化」については、岡本秀忠「対抗社会

化 (countersocialization) をめざす社会科—S・H・エンゲルの内容構成論を中心に—『社会科研究』全国社会科教育学会, 第 39 号, 1991 年, pp. 27—38. を参考にした。

- (5) 山田, 前掲書, p. 125.  
 (6) 山田, 前掲書, p. 125.  
 (7) 森分孝治『『今, 社会科とは何か』をなぜ問うか』『社会科教育』No. 375, 明治図書, 1993 年, p. 127.  
 (8) 溝口和宏「開かれた価値観形成をめざす社会科教育—「意思決定」主義社会科の継承と革新—」『社会科研究』全国社会科教育学会, 第 56 号, 2002 年, p. 32.  
 (9) ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウエンガー, 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書, 1993 年, pp. 9—12.  
 (10) 棚橋健治『社会科の授業診断 よい授業に潜む危うさ研究』明治図書, 2007 年, pp. 39—43.  
 (11) レイヴ, ウエンガーは「周辺性」について「権力を行使する位置にある, と同時に十全参加から距離をおかれているために権力が行使できない位置にある」としている。こうした意味から周辺性は実践共同体間での結合と相互交流を喚起すると同時に阻止する場である。子どもが「環境の保護のために分別をもっとすべき」という価値を相対的にとらえる

ことができたのは、「権力の行使が十全に行き届かない」周辺の立場を経験したからであろう。(レイヴ, ウエンガー, 前掲書, p. 11.)

#### 【参考文献】

- (1) 原田正純『水俣病』岩波新書, 1972 年.  
 (2) NHK 取材班『戦後 50 年その時日本は第 3 巻』NHK 出版, 1995 年.  
 (3) 宇井 純『公害の政治学』三省堂, 1968 年.  
 (4) 水俣病 50 年取材班『水俣病 50 年—「過去」に「未来」を学ぶ』西日本新聞社, 2006 年.  
 (5) W・ユージン・スミス, アイリーン・M・スミス, 中尾ハジメ訳『写真集 水俣』三一書房, 1980 年.  
 (6) 政野淳子『四大公害病 水俣病, 新潟水俣病, イタイタイ病, 四日市公害』中公新書, 2013 年.  
 (7) 服部美佐子・杉本裕明『ごみ分別の異常な世界 リサイクル社会の幻想』幻冬舎文庫, 2009 年.  
 (8) 寄本勝美『リサイクル社会への道』岩波新書, 2003 年.  
 (9) 梅津正美・原田智仁編著『教育実践学としての社会科授業研究の探求』風間書房, 2015 年.

## Society recognition for Formation of sense of values

### — The Case of Unit “Processing of trash and Our Daily life” —

Michiko Kamita

*Department of Primary Education, Faculty of Education, Okayama University of Science  
 1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005 Japan*

(Received October 24, 2016; accepted December 5, 2016)

This study examines the class process of the learning of social studies to develop values and the child's valuation formation by value study in an elementary school.

**Keywords:** fostering values formation, value study, social studies lesson in elementary school, to adjust value study and curriculum guidelines, class process of the learning of social studies to develop values